

受け継いできたものを 次世代に伝える「再生」

古民家「H邸」

古民家を「ハイブリッド再生」する

大阪平野の東南部は、古くから豊かな田園地帯として栄え、多くの集落が点在していた。羽曳野市古市地区も、その中の一つで、かつての竹内街道と東高野街道が交差し、さらには石川を使った水上交通の拠点として栄えた。その当時、街道沿いには、お大尽の住宅が並んでいたが、今や残っているのは、三〇〇年前に建てられたという古民家「H邸」だけ。一区画を占める巨大で威風堂々たる建物は、この地区に住む人たちの日常生活に欠かせないランドマークになっていた。しかし、経年変化により傾きが激しくなり、生活スタイルも変化して使いづらい空間構成になっていたことに加え、阪神・淡路大震災の影響で、さらに、いたみが加わったため建て替えを検討す

ることに。だが、単に個人住宅としてだけでなく、町の財産ともいうべき存在にならなければならない。残すことに意義があると判断し、改修(再生)工事を行うこととなった。

H邸の改修(再生)においては、伝統的な日本家屋が持つ力強い梁と柱、そして凝った建具など、それらを最大限に生かしながらも、基礎補強・耐震補強を含む軸組みの改修に加え、居室の配置を変えて開口部を新たに設けるなどして明るい空間造りや、現代的な要素として、アルミサッシをはじめ、屋根・壁・床の断熱と複層ガラス窓などを活用することで、断熱性に優れた快適な居住空間づくりにも成功している。さらに、太陽光発電などの最新の省エネルギー設備も導入しており、まさに「ハイブリッド再生」と呼ぶに相応しい建物に生まれ変わった。

ナビゲーター
関西ビジネス
インフォメーション(株)
Kansai
Business
Information
Inc.



再生前のH邸。建物は設備的な制約から南側に風呂場などが設けられ、太陽の光をさえぎっていた。また内部も、長年の使用により建具などの損傷も進み、とてもそのままでは住み続けることができないような状態だった





表通りのファサード。入口の位置や黒壁など、実はかなり手が入られているが、元の外観デザインを踏襲して改修されているので、一見すると、どこが変わったのが気付かないほど自然に景観に溶け込んでいる



改装後、母屋の南側にあった増築した部分は全て取り除かれた。そして、保温性に優れたアルミサッシとペアガラスを組み合わせた、広い開口部が設けられ、快適で明るい縁側も実現した



手前の蔵は、昨年に母屋が改装された時は手つかずのままだったが、屋根のふき直しや外装をやり直しており、さらに魅力的な古民家になる予定



新しく設けられた前栽に臨む明るい正面玄関。元は座敷だったというが、その面影は全くない。それも、建物の持つ重厚な雰囲気と合わせた玄関の造りと意匠のおかげだろう

こうした大改修を行ったにも関わらず、建物の外観・内部ともに、重厚で歴史を感じさせる印象は今までとほとんど変わらないのは、伝統的な「技」に加えて、街路に面した側には馴染みのあるファサードを残

すなど、後世に伝えるべき景観も維持しながら次の百年も快適に暮らせる「工」住宅へ再生しようと試みた努力によるものだろう。

(文責・CEL編集室)

CEL



再生なったH邸の外観を南側の庭から見る。右ページの改修前と比較すると、どこがどのように改装されたかがよく分かる。なお屋上に設置されているのは、太陽光発電パネルと太陽熱温水ヒーターで、エネルギーの有効活用を図っていて、まさに新旧の技が入り混じった『ハイブリッド再生』がなされている